



青山七恵

評論部門について、

「運動する写生——映画の時代の子規」は、子規の思想の変遷と映画の論理との照応性を巡って多数の引用に周到な考察が重ねられており、最後までごく堅実にまとめられてはいるものの、緻密な講義ノートを読ませてもらった印象で、与えられた情報量の割にこちらから生意気な意見や質問をする気になれない点に物足りなさを感じた。

「『帝国』に抗して——中島敦論」に関して、私もそもそこの評論の前提となっている「帝国」のイメージが最後までつかめず、読みづらかった。著者にとっての「帝国」が具体的にはどこまでの意味を含む「帝国」であるのか、それがこの

評論の大きな足場であるからには明確に説明すべきだったと思う。

「自分ならざる者を精一杯に生きる——町田康論」は、語り手の属性を巡って著者の言い分が二転三転するので混乱した。琵琶法師から小沢健二まで強引ながらも持てるものすべてを自説に取り込んで発展させていこうとする姿勢には好感を持った一方、「社会の文脈を超えていく」「やむにやまれぬ情熱」など、肝心な部分で抽象的表現に逃れているのが気になった。ただ、そういう指摘を聞きつければ即座に二倍三倍の言葉で言い返してきそうな著者の覇気は感じられた。

一長一短はあるけれど、子規論と町田論に優秀作の可能性があると思っただけで選考会に臨んだ。ところが議論を重ねていくにつれ、それぞれの作品が抱える難点が当初よりも強く意識されてきて、この二本が来年以降評論部門の応募者にとって「お手本」となっては困るといふ懸念がなかった。とはいえもともと志の高い人は「お手本」に沿って書くようなことは

しないだろうから、それは杞憂に過ぎないのかもしれない。

小説部門について、

「デモ行進」は、「まさかあの老人が個体を増やしているはずはないが、このザリガニのように死んでない」と誰に言えよう、「ナメクジが天国まで持っていったのだと、彼らは言った」など、変なものどこか説得力のある文章が要素所に効いていて、ずっと真顔で冗談を言い続ける人の前に立たされているような気持ちで終始惹きつけられて読んだ。ただ、結末で村と死刑囚の因果関係に一応の決着がついてしまっていることが、逆に小説の魅力を削いでしまっている気がして、強く推しきれなかった。

「睡魔はおうど色の空に沈む」。明け方に孤独な女主人公が代わり映えのしない未来に思いを馳せながらペランダでチョコレートを食べるシーンは、美しくもありこの小説をよく集約している部分だと思えうけれど、なんだかチョコレートのコマールシャルを読んでいるようだった。全体的に著者が主人公に同情しすぎているよ

うに思う。

「青の彼岸」は、善悪の根拠、記憶の捻れ、アイデンティティの崩壊、父親との確執など、書きたいことを欲張りすぎてしまった。欲張ること自体はいいことだけれど、一つ一つのテーマにとことん腰を据えて考え抜く覚悟がほしい。ただ、「睡魔はく」のチョコレートとのシーンと対照的に、こちらの主人公が布団のなかでサンマの蒲焼きの缶詰を水もご飯もなしに食べるシーンには、紙面からいやおうなしに染み出してくる人間臭が感じられた。食べているものの差ではなくて、この著者の力量だと思う。

「アンドロイドたちの惑星」。中盤までは興味を持って読んだけれど、尻すぼみになってしまったもったいない。キーパーソンである先生のもたらさない発話は思い切って削って、あくまで主人公カップルの関係の変化、もしくは徹底的な不変化を突き詰めてみたらどうだろう。

「吾輩ハ猫ニナル」。もったいぶった冒頭から始まって、数ページ後には紙面いっぱいに見慣れない漢字とルビと注が所狭

しとひしめく。最初は読みづらくて嫌だなあと思い、いちいち注をめくるのも著者の途中で遊ばれているようで癪だったはずなのに、読み進めるにつれなぜだか喜んでいく自分に気づいた。呆然としてくるのは、「ちよっぴりぼっちゃりまこにゃん」が出てきたあたりから。読み終えた直後は「呆然」のあとに「自失」までついでしまいそうだった。ここまで読んできたものは、一体なんだったんだらう？ 戸惑いがあまりに大きくて、とても当選作として推す心境には至らなかつた。けれども選考の場で強くあがった肯定的な意見を聞くうち、この小説は、真面目に読んで真面目に戸惑い、結果×をつけてしまうような自分のような読者（そして書き手）のためにこそ書かれたのかもしれないと思えてきた。今は、その真面目さがはらむ胡散臭さを、この小説に笑われているような気持ちだ。受賞となった横山さんにはこれからもどんどん、読む人を呆然とさせ、挑発していったらいい。

## 選評



### 阿部和重

評論部門に推せるものはなかったが、掲載に反対はないという考えにより、二篇を優秀作とすることにわたしは同意した。最も低調だった『帝国』に抗して——中島敦論』は、好意的にみれば柄谷行人の二次創作だが、その電波文書的エクリチュールは評論としてのまとまりをあまりにも欠いている。論者にはせめて、「転倒」と「異様な世界の開示」以外のことにも注目してほしかった。『自分ならざる者を精一杯に生きる——町田康論』は、町田作品の饒舌体における言葉の自己増殖運動を理論的に抽出する試みだが、当のアイディア自体は悪くない。が、粗雑でご都合主義的な論述とテクストの読み込み不足がひどく目についた。この程度では町田作品を読み解いたとは言えない。『運動する写生——映画の時代の子規』は、いちおうは筋の通った議論を展開で

きてはいる。が、リアリストたる子規の俳句論に（次世代メディアとしての）映画との「抜き差しならぬ照応性を見る」というアイディアは、とりたてて驚くようなものでもなく、結果的には単なる同時代性の追認に留まってしまっている。これならば、むしろ終盤で引用される寺田寅彦の発想にデジタル表現論の先取性でも無理矢理に見出すほうが、刺激的な議論になりえたのではないか。

小説部門の『アンドロイドたちの惑星』が、「会話困難者」の描写に失敗しているのは、一人称の饒舌体を採用したためだろう。語り手の律儀な分析的物言い自体は本作の長所とも言うもののだが、「時計じかけ」の男女間のドラマにようやく時差が生じたところで幕切れとなってしまう。この物語を適切に終わらせるには、彼女視点のパートも描かねばならなかった、というのがわたしの考えだ。『睡魔はおうど色の空に沈む』は、良くも悪くも教科書的で既視感が強いが、あえてそのことは措く。それよりも、書きたいところのみを書き、あとは投げっぱなしのまま作者の都合だけで終えてしまった

ような作品の締め括り方は見すごすわけにはゆかない。一定の技術を持っていて

も、これっぽっちの風呂敷も畳めないようでは先行きは暗い。『青の彼岸』は、既視感の発生に抗い、書きにくいことも書こうとする作者の気概のようなものを一時的には感じとれたが、最後まで読み通すと、単に未整理なだけだったという悪印象しか残らない。おまけに唐突な「父殺し」への言及があるせいで、とどのつまり作者は、そうしたシンボリックな純文学的クリシェの数々とただ戯れてみたかったにすぎないのではないかとさえ思えてくる。『デモ行進』のメルヘン的な寒村物語は、ダブルプロットのもう片方の主人公たる死刑囚が、罪と罰を受け入れるまでの内面的変遷を形象化したドラマと読み解くことができる。が、幻想だからといって、設定や展開が恣意的でよいということにはならない。幻想小説的表現は、作者が少しでも力を抜けば自堕落な空想と見分けがつきにくい。だとすれば、作品世界の構築は厳密でなければならず、作者が困難を避けて楽に書いていると見られてしまえば「夢」は成り立た

ない。

今回、わたしは当選作の『吾輩ハ猫ニナル』のみに○をつけ、ほかは小説も評論もすべて×をつけた。今年にかぎらず、過去二年間の最終候補作と比較しても、本作は明らかに傑出してゐる。そして評論部門のどの候補作よりも、この小説は高い批評性を有しており、しかもそれが創造性と直接に結びついている。小説の候補作中最も枚数の少ない短篇だが、仕掛けに満ちていて、読みどころは多々ある。語学を軸とした日中間の文化的懸隔を背景に据えて文章表現にも独自の工夫を加え、心境小説から観光小説へと移ろううちに夏目漱石と奥泉光の周囲を旋回する、周到着実に組み立てられた二重三重のパロディーの試み。本作の特徴を要約すればこうなるが、それらはひとえにあの、驚くべきクライマックス場面を実現させるためだけに作中に組み込まれていることに感動させられる。そこにかかれた執筆上のコストが、並大抵のものではないのは誰の目にも明らかだろう。物語上で起こる出来事自体はいたくバカバカしいが、そのことも含め、作品はき

わめて的確に二国間の言語的現実と「猫」という記号の歴史性を描き出している。それにしても、おそらく作者は、さらに枚数をかけてエキセントリックなエピソードを盛り込み、いくらでもペダンチックに書くこともできたはずだが、本作は終始たいへん抑制的に書かれている。わたしが最も感心したのはその、目的実現のために自らの創意を調える、作者の自制的な筆運びだった。最後の選考の機会にこれほどの候補作と出会えたことは僥倖だったと言える。

## 選評



安藤礼二

評論部門三篇、小説部門五篇のそれぞれの候補作に、私は三段階の評価をつけて選考会に臨んだ。×は作品としての体をなしていない。△は他の候補作と比較して相対的に評価すべき点がある。○は他の候補作と比較して圧倒的に優れている点がある。○は当選作、△は、ある場合には優秀作に推す、という基準である。

評論部門で、私は坂口周の「運動する写生」と矢野利裕の「自分ならざる者を精一杯に生きる」に△をつけた。佐野正人の「帝国」に抗しては、「帝国」を生き、「帝国」に抗した中島敦を主題とした論考であるが、私には作者のオリジナリティをまったく感じることができなかった。どこかで読んだ記憶のあるポス・コロ、カル・スタ全盛時代の中島敦論をただ切り貼りしただけ、という印象である。坂口のもものは、子規の写生論を、まさに同時代に誕生したばかりの映画というメディアから論じたものであるが、私は批評というよりも学術雑誌に掲載される研究論文だと思った。つまり一つの主題を堅実に、なおかつ深く掘り下げているが、ただそれだけのものである。それに比して、矢野のもものは明らかに作者自身の表現への意志に結びついている。つまり批評である。しかし、町田康という独特な魅力をもつ書き手の作品世界を論じながら、それを真摯に掘り下げることをせず、「語り」についての饒舌が過ぎると感じた。また文中で、突如として私の名前が言及されるが、何かの目配せだ

としたら、まったく余計な一節である。研究なのか批評なのか。選考会では、どちらを選ぶか、あるいはどちらも選ばないかという議論になり、それぞれを優秀作に推す選考委員もいることであるし、サンプルとして二作を優秀作で掲載するという結論に落ち着いた。ただ、私としては、優秀作を二作出すことについては最後まで反対した。一長一短があり、他の候補作と比較して圧倒的に優れた点があることが明白である以外、優秀作として、それらすべてを無条件で掲載してしまうことは「妥協」であると思う。昨年度の選考会でも強く感じたことであるので、私は、どちらも優秀作として掲載すべきではないと主張した。厳しいことを記しているかもしれないが、二人には、ぜひとも今後、このような私の評言を根底から覆す批評家になってもらいたいと思う。

小説部門で、私は横山悠太の「吾輩ハ猫ニナル」に○を、濱野ともみの「睡魔はおうど色の空に沈む」と山崎健の「デモ行進」に△をつけた。他の作品が応募規定ぎりぎりまでの枚数を費やしている

のに対して、横山の作品はわずかその半分強である。その点にまず作者の批評性を感じた。その結果として、作品自体も無駄が削ぎ落とされ、よく練り上げられた、クリアかつコンパクトなものになっている。この作品のなよりの魅力は、われわれが普段まったく意識しないで使っている漢字と平仮名、そしてカタカナからなる日本語の異様さを、中国と日本の「混血」(ダブル)の少年を通して、描き尽くした点にある。しかも、途中までは漱石の批評的なパロディと思わせながら、作者は、少年をまったく思いもつかなかった方法で、文字通り「猫」にさせてしまう(不覚にも読んでいて思わず噴き出してしまった)。その瞬間、少年が忌み嫌っていたカタカナが満ち溢れる。

横山の作品の完成度に比べると、他の作品はどうしても数段評価が落ち、掲載には至らなかったが、それでも私は、「物語」を破綻なく仕上げているという点で濱野の作品を、虚構の「世界」を構築しようという意志を貫いているという点で山崎の作品を評価したいと思う。濱野の作品は、古びたマンシヨンの掲示板に不

定期に貼られる「貼り紙」を介して、部屋に引き籠もるように暮らしながら着付けやヘア・メイクを行って生計を立てている姉と、その姉をさまざまな方法でサポートする大学生の弟、さらにはその姉弟を訪ねるようになった一人の女性をめぐる物語である。やがてその女性は、弟に執着を示す別の住人とのトラブルに巻き込まれ、マンシヨンの建て替えとともに、すべての関係に終止符が打たれる。まったくの他人である姉弟との関係のなかに安らぎを見出し、最後には姉とともに昼寝をしてしまう女性の描写など、捨てがたいものがあった。このような、何気ないが魅力的な「物語」を紡ぎ出せる能力を評価したいと思った。

山崎の作品は、死刑を宣告された一人の男と、自分たちとはまったく無関係であるその男を救うためにデモを組織し、そのデモを何十年にもわたって続けている山奥に隔絶した村の住民たちを描いた、カフカのな物語である。虚構の「世界」を、精密かつ執拗に描き続けていこうという意志を貫いている点は評価したいと思う。しかし、やはり、物語としては長

すぎると思う。ところどころ生々しく光る描写はあるが、全体として、創造的な反復ではなく、単調な反復を免れていない。「物語」を破綻なく仕上げているという点では西野文明の「アンドロイドたちの惑星」も、虚構の「世界」への意志を貫いているという点では松葉将生の「青の彼岸」もあてはまるが、濱野に比べて西野は作為が過ぎ、山崎に比べて松葉は無作為が過ぎていと思われたので、ともに評価できなかった。

## 選評



奥泉光

現在文芸誌の公募新人賞で評論部門があるのは『群像』だけであるが、ここ三年ほど選考委員をやってみて、批評と云うジャンルの力の衰えをどうしても感じてしまう。文学研究とも社会学とも違う、批評としか呼びようのない形式は、二十世紀一杯で命数が尽きてしまったのか。と、ひとつごとくのように云っているが、もしそうだとしたら、小説もまた同じ運命

の下にあると知らねばならない。批評と文学研究が地続きであるように、小説と批評も地続きであり、その地盤沈下は文学研究、小説をもるとも引き摺り込まず

にはおかぬ。批評が沈んだあとには無味乾燥な研究と単純な物語しか残らないだろう。いや、すでにそうなりつつあるので、しかし自分はその趨勢に抗したいと思う。今回で選考委員は最後になるが、よい批評の書き手の登場に自分は期待し続けるだろう。もつともそれは我々が知る批評とは違う何かであるかもしれない。批評も小説もジャンルとして消えてもかまわない。だが、言葉の運動が作り出す批評の力、それだけは我々の自由のため

に失ってはならないと思う。評論部門の候補作は三作。選考会ではどれも水準に達していないとなり、優秀賞を含め受賞作なしとの意見がかなり有力であった。が、自分は矢野利裕氏の町田康論の、文章の錬磨やテクストの読み込みの点では不満ながら、現代小説のありうる場所を論じて走る筆の威勢よさに可能性を感じ、優秀作ではどうかと提案した。叙述の流れに引き寄せられる誰か

の言葉は、吟味されぬまま思いつきで並べられ、とり散らかった印象があるが、跳ね回る思考が魅力に転じる可能性のその先を見たいと思った。

坂口周氏の子規論は手堅く誠実な論述に好感はもったが、批評作品としての魅力には欠ける。佐野正人氏の中島敦論は、文学が帝国のメディアにほかならず、それを中島敦が批判しているのだとの論旨のものだが、肝心要の帝国の概念への掘り下げがないために、「帝国」の言葉が呪文のように繰り返されるに終始してしまつた。

小説部門は、どの書き手にも可能性を感じたが、なかで横山悠太氏の「吾輩ハ猫ニナル」が出色であった。「日本語を学ぶ中国人を読者に想定した小説」とのコンセプトの下、基本的に片仮名を使わず、ルビつきの漢字を駆使したテクストの構築は素晴らしい。長さの点で、つまりこれだけ工夫のある文体ならば引き寄せずにはおかぬはずのフィクションの動きや厚みの点で、やや物足りなさを覚えたものの、それはないものねだりと云うもので、ものとしての言葉を扱うこの徹底ぶ

りもたらした批評性こそ、まさしく小説の名にふさわしいと評価できる。なるほど「猫ニナル」とはそう云う意味なのかと知らされる、馬鹿馬鹿しくも可笑しい結末の、「感動の物語」を嘲笑う姿勢も頼もしい。やはり徹底的なものだけが面白いのだ。

西野文明氏の「アンドロイドたちの惑星」は、会話困難者（他人とまともに会話できない人たち）のクラブで出会った男女を主軸に据えた話で、文章は過不足なくアイデアも面白くて、ことに女性が途中からクラブの別の男性ともつきあいはじめ、その模様を二人が「話題」に出すあたりでは、奇怪な三角関係の形が現出して、「これは！」と思わせたが、先の展開がないまま小説は終わってしまった。想像力を駆使し、人物たちが作者の手を離れ動き出すまでにアイデアをしゃぶりつくすべきであつただろう。

山崎健氏の「デモ行進」は、ある死刑囚の減刑を嘆願する人々の住む山奥の村を中心にした話で、小説は寓話ふうに展開するのだけれど、であれば必要なはずの、不可思議な世界の感触を不可思議な

ままに支えるべき言葉のセンスを欠いて  
退屈なところが、構成の不備を含め評価  
しにくかった。とは云え、山奥の村に住  
む人物たちはなかなかチャーミングで可  
愛らしい。

松葉将生氏の「青の彼岸」は分かりに  
くい小説だった。筋が無闇と飛躍したり、  
出鱈目で掴みにくいと言うのではなく、  
基本はリアリズムに近いスタイルである  
がゆえに、主人公の行動の意図や、彼の  
友人が急に老人になってしまふあたりの  
意味が捉えにくかった。むしろ小説は何  
が起こってもかまわぬわけだけれど、虚  
構を支えるだけの構成やスタイルがもつ  
と計算される必要があるだろう。しかし、  
日常に地続きの異界の定着のさせ方や、  
細部の描写には光るものがある。

濱野ともみ氏の「睡魔はおうど色の空  
に沈む」は、古い団地ふうの住宅地を舞  
台にした、住人たちの交流の話で、ゆる  
やかに安定した文章はフィクション内容  
にうまく合致して、完成度は一番である  
かもしれない、が、そのフィクション内  
容があまりにも典型的で、小説にとって  
完成度がいかに無意味であるかを示す結

果になってしまった。とは云え、作者に  
技術はあり、良い題材を見いだせば、面  
白い作品を書く可能性がある。このこと  
は今回落選となった他の作者にも云える  
ので、粘り強く書いて欲しいと思います。

## 選評



## 辻原登

「吾輩ハ猫ニナル」は、上海に住む日中  
混血の少年カケルの冒険譚である。冒険  
譚としてはしれたものかもしれないが、  
じつはここにはもう一つの端倪<sup>端倪</sup>すべから  
ざる作者の野心、たくらみが試みられて  
いるからそう呼んでもおかしくない。

カケルは五歳まで日本人の父親と中国  
人の母親のもと、日本で育ったが、その  
後母親とともに上海にもどって祖父母と  
四人で暮らしている。高校を卒業して、  
科技大学に進学が決まって蘇州にやって  
きたばかりだ。彼は日本語はできるが完  
璧ではない。上海で通っていたのは中高  
一貫教育の学校で、日本語の授業もあっ  
た。高一のとき、日本人の教師が『坊っ

ちゃん』を朗読してくれたのをきっかけ  
に読み通した。時々、日本へ行って、父  
親と投接球<sup>キャッチボール</sup>をした。父親の書齋に『吾輩  
ハ猫デアル』をみつけ、もらって帰り、  
半年かけて読んだ。その翌年、父親の死  
の知らせが来る。

と、まあこういう過去を背負った主人  
公が蘇州の公園の廟で、父との思い出で  
ある投接球を壁を相手に一人でやってい  
ると、外れた球をくわえて一匹の三毛猫  
が現われる。漱石の『猫……』を読んだ  
ことのあるカケルは、猫は神の化身、分  
身と考え、三毛猫を「先生」と呼んで、  
その身影<sup>すがた</sup>を追い求めるようになる。

そんなある日、母親からの電話で、ピ  
ザの更新のためすぐ日本へ行かなければ  
ならなくなる。冒険はここからはじまる  
のだが、母親から渡された三万四千六百  
円ぼっきりを懐中に飛機に乗るカケルは、  
どこか『三四郎』の冒頭の汽車の旅を髣  
髴させる。

のちに広田先生と分かるヒゲの男が、  
車中で三四郎に、「(日本は)亡びるね」  
と言う。カケルの旁边<sup>となり</sup>の座位<sup>せき</sup>の阿姨<sup>おば</sup>さん  
も同じ台詞を吐く。「このままじゃ亡びる

……」。

三四郎が日中混血ゴツプルになって、百年後に飛機に乗って上京してくる(？)。果たして、東京で待ち受けていたものは……。

カケルは中学時代、俳句をもじって俳句と名付けた短詩を作る。FAKE。俳句雑誌「子規ネトトギス」を発刊する。秀逸な、父親との投接球の場面は、野球の名付け親、正岡子規へのオマージュだろうし、父親の名前は升ノボなのだ。のぼるは子規の別号ではなかったか。

先に述べた、カケルの冒険より何倍も大きな冒険は、この小説が、

(日本の近代小説は)読むに堪えない、夏なんとかという作家の書いたものなどは漢字の使い方からして出鱈目である、ああいうのを中国語では「馬馬虎虎マァマァフフ」と云うのだ、

との馬マなにかしという日本語のできる中国人の意見に触発された上海在住の、退屈の泥沼にはまつてゐる日本人「わた

くし」によつて、「日本語を学ぶ中国人を、読者に想定した小説を書く」といふ目論見で書かれたものだといふことだ。大それた野心、奇抜卓抜な思ひつきである。近代日本の小説家で、誰が思ひつき、実行しただらうか。

「わたくし」はこの冒険に乗り出し、横山氏はそれに成功した、と思ふ。千三百年の昔、『古事記』はかうやつて書かれたのかもしれない。

創意と批評精神にみちた作品である。漱石も大吃びつくり一驚即天だらう。

誉め過ぎだ、乱七八槽いいかげん、山寨いふちだと言はれても、作品を読んでいただければ、郷下人だらうが面包片カッパだらうが、気を生たてず、別説別説三道四地、当選作「吾輩ハ猫ニナル」を祝つてくれるに相違ない。

小説では他に、「睡魔はおうど色の空に沈む」と「青の彼岸」が印象に残った。

「青の彼岸」は、濃密な時間の流れを、徐屋町ソヤマツという地続きの異界の中に実現して、読みごたえがあった。「睡魔は……」では、淡そうにみえて、じつは危険をは

らんだ人間関係が、眠れない女を軸にして浮かび上がってきて、不気味な像を残して消えてゆく。

評論部門で、再び「子規」と出会うという好運に恵まれた。「運動する写生——映画の時代の子規」である。「写生」というアイデアから、「活動」という概念の把握までの展開と推移を、イメージの識闕下でとらえてゆく作者の仕事ぶりは篤実で犀利だ。子規における時間・空間のベルクソンの渦巻を丁寧(ドゥマ)に追い、映画のまだない、映画をまだみたことのない子規が、映画文法ドマⅡ夢の文法を先取りして、近代日本の散文を切り開いていった苦闘ぶりを語つて余すところがない。納得させられた。

『「帝国」に抗して——中島敦論』を面白く読んだ。「帝国」と「文学」の関係もよく分かった。だが、中島敦については、これだけでは中島敦の百分の一に触れたにすぎないという気がする。ステイヴンズと『光と風と夢』と中島敦の世界は、いまだ発掘されざる宝の山なのだ。